

歴史と文化を活かしたまちづくりが始まります
『渋沢栄一翁と論語の里』整備活用計画

『渋沢栄一翁と論語の里』整備活用計画実現のための取り組みの一部を紹介します。計画の詳しい内容や取り組みについては、市ホームページをご覧ください。

①史跡・建築物の保存活用

『中の家』『尾高惇忠生家』や関連する文化財に関する情報発信や改修・公開に取り組みます。『中の家』は、創建当時（明治28年）の姿に復元することを目標とし、併せて公開に必要な設備を整えます。



『尾高惇忠生家』が市に寄贈されました
このたび、『尾高惇忠生家（市指定文化財）』を、ご子孫である所有者様のご厚意により、市へ寄贈いただきました。今後は、市を代表する偉人の生家として幅広く活用していきます。

②人材育成

渋沢栄一や尾高惇忠といった大きな功績を遺した偉人に限らず、広く地域の歴史や文化に対する知識や情報を持った人材『歴史ボランティア』を育成します。

③学術調査

渋沢栄一が尾高惇忠生家まで通った道（論語の道）を、史実に基づき定めるための調査を行います。また、中瀬河岸場跡に関する調査・研究を進めます。

④生活環境の向上

『中の家』や『尾高惇忠生家』『渋沢栄一記念館』などへの主要なアクセス道路に、歩行者や自転車の散策を想定した歩車分離の明確化（カラー舗装など）を進めます。

⑤産業振興（観光）

自動車での来訪者のために、渋沢栄一記念館前にエリア内の中心的な駐車場を整備します。また、エリア内を快適に移動できるようにレンタサイクル拠点を設けます。

⑥学校教育・生涯学習

『中の家』や『尾高惇忠生家』を活用し、次世代を担う経営者や企業家を対象とした経営セミナーや、子どもを対象とした昔の体験遊びイベントなどを開催します。

⑦協働・連携

農業者や市民団体と連携して、藍の栽培やネギの収穫などの農業体験を実施します。また、大学や学生による調査やまちづくり提案の機会を設けます。



歴史と文化を活かしたまちづくりが始まります

『渋沢栄一翁と論語の里』整備活用計画を策定しました

文化振興課 (☎ 577 - 4501)

歴史と文化を活かして
地域活性化に取り組み

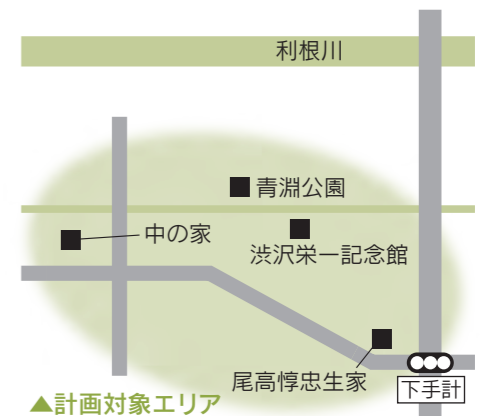
群馬県富岡市にある「富岡製糸場」の世界文化遺産登録を目前に控え、かわりの深い深谷の偉人渋沢栄一や尾高惇忠への注目がますます高まっています。

近代日本経済の父と言われる渋沢栄一や、富岡製糸場初代場長を務めた尾高惇忠を輩出した八基地区では、江戸時代から独自の地域性が育まれ、大きな功績を遺した偉人を輩出するとともに、現在も偉人にゆかりのある史跡などが多数残されています。

そこで市では、これら郷土の偉人や歴史を伝える文化財などを活かして、地域の活性化に取り組みようと、渋沢栄一や尾高惇忠ゆかりの文化遺産を保存活用する計画を策定しました。それが『渋沢栄一翁と論語の里』整備活用計画です。

計画実現のための
7つのキーワード

この計画では、渋沢栄一生地『中の家』および『尾高惇忠生家』を含む範囲を計画対象エリアとします。



このエリアは、渋沢栄一が幼少期に、藍玉の売買などを通じて経営の基礎に触れ、さらに論語をはじめとした諸学問を学んだ場所です。その歴史的背景に着目し、『渋沢栄一に代表される偉大な人物を輩出した場所』として市内外に広くPRするとともに、その特色を引き出すため、7つのキーワードを設定し、平成30年度を目標にさまざまな取り組みを行います。（次ページ参照）

今後、この計画の実現に向けて市全体で取り組むために、市民協働会議などを通じて、市民のかたがたや各種団体、企業の皆さんなど意見交換を行いながら、協働により推進していきますので、ご協力をお願いします。

市外のかたも知りたい『深谷の偉人』のこと

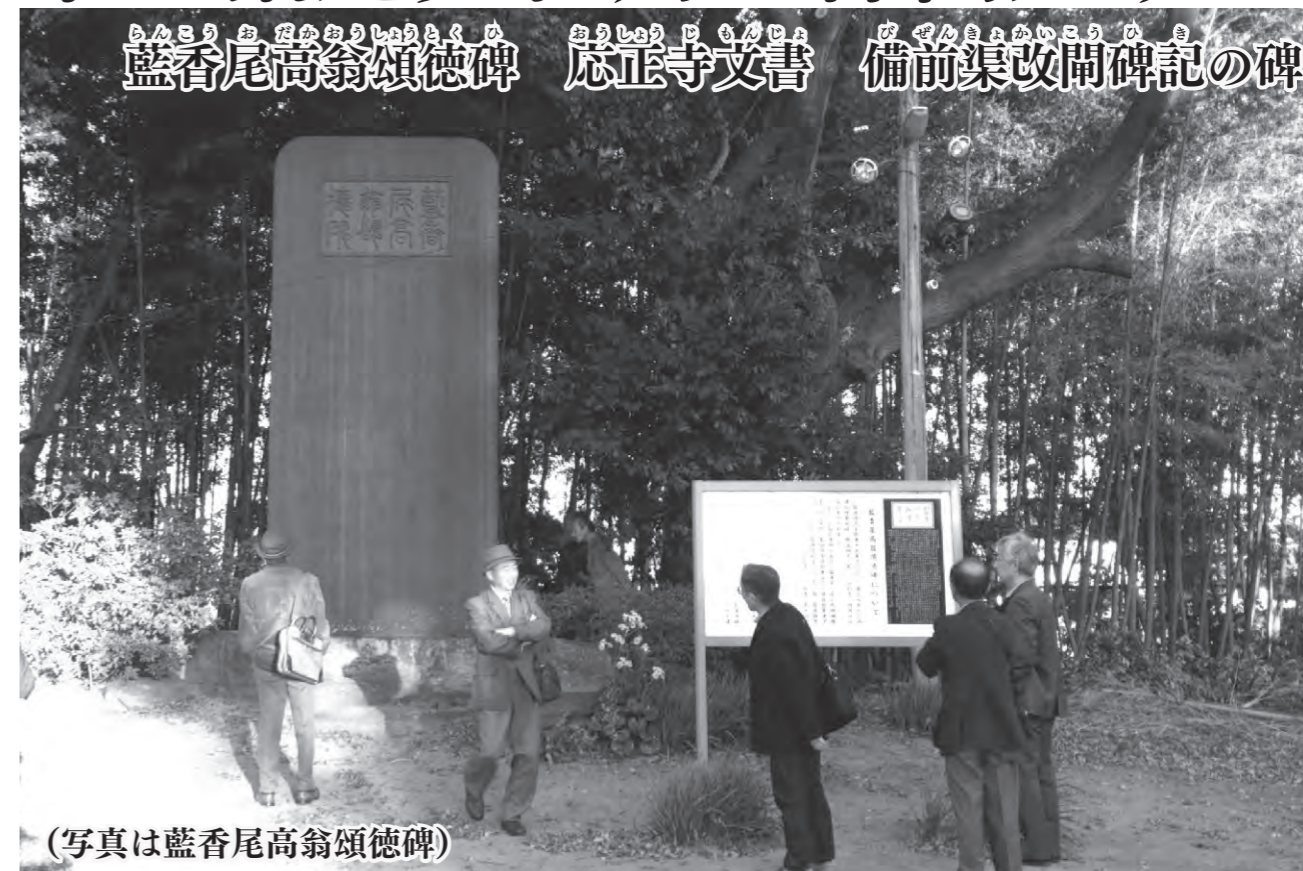
渋沢栄一記念館解説員 篠田鼎一郎さん



渋沢栄一記念館には、市内はもとより、市外からもたくさんのかたが渋沢栄一や尾高惇忠のことを知りたいと訪れます。最近「富岡製糸場で聞いた」と言って来るかたも増えました。郷土の偉人や歴史を活かしたこの取り組みを通して、今の日本の基を作った郷土の偉人の偉大さや、偉人を生み育てた深谷のことを、もっと深く、そしてたくさんのかたに知ってもらえるといいですね。

市の指定文化財へ仲間入り！

藍香尾高翁頌徳碑 応正寺文書 備前渠改閘碑記の碑



(写真は藍香尾高翁頌徳碑)

問文化振興課 (☎ 577 - 4501)

市の歴史を知る上で重要なものとして、『藍香尾高翁頌徳碑』『応正寺文書』『備前渠改閘碑記の碑』が、3月13日に市の指定文化財に指定されました。ここでは、新たな指定文化財の特徴について紹介します。

北関東随一の名碑として 名高い『藍香尾高翁頌徳碑』

『藍香尾高翁頌徳碑』は、尾高惇忠の人柄や業績を伝える石碑です。

尾高惇忠は、群馬県富岡市にある富岡製糸場の設立の中心人物で、初代場長を務めました。また、第一銀行盛岡支店長や仙台支店長を歴任するなど、東北地方の産業や経済の振興に寄与しました。

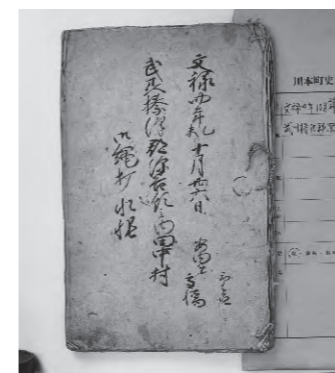
この石碑は、惇忠に学問を習ったいとこの渋沢栄一らにより、明治41年(1908)、尾高惇忠生家に近い鹿島神社境内(下手計地内)に建てられました。

石碑の裏には、協力者として第一銀行をはじめとする法人5社、個人453人の氏名が刻まれています。北関東随一の名碑として世間の評判も高く、後世に残すべき資料として指定されました。

田中村の歴史をうつす 『応正寺文書』

『応正寺文書』は、応正寺(田中地内)が所蔵する古文書で、文禄4年(1595)に行われた文禄検地により作成された土地台帳です。

文禄検地は、戦国時代に武蔵・相模両国を支配した後北条氏の滅亡後、関東に入った徳川氏により行われました。権力者が移り変わる当時の田中村の土地所有状況を明らかにする貴重な史料として、指定されました。



▲全部で6冊ある応正寺文書

洪水との戦いの歴史伝える 『備前渠改閘碑記の碑』

明治36年(1903)に建てられた『備前渠改閘碑記の碑』(矢島地内)は、備前渠の歴史を伝える石碑です。

備前渠は、本庄市から深谷市を経て熊谷市に至る流域の水田を潤す一大農業用水路です。慶長9年(1604)に烏川を取水口にして開削されましたが、天明3年(1783)、浅間山の大噴火により烏川が埋没し、利根川と合流したことにより、この地域はたびたび洪水の被害に見舞われることになりました。

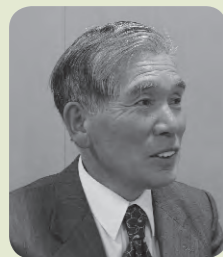
その後、明治34年(1901)に渠底の浚渫工事が完成し、洪水の心配がなくなったといえます。

石碑の裏には、工事の協力者として法人2社、個人285人の氏名が刻まれています。

この碑は、自然災害と戦いながら生きてきた地域の人々の暮らしを伝える、歴史的な資料として指定されました。



▲備前渠沿いに建つ石碑



深谷市文化財保護審議会委員
おぎの かつまさ
荻野勝正さん

文化財は郷土の歴史を証明する大切な『財産』です

文化財は世代間で受け継いでいくべき、市民共有の大切な財産です。先人から大切に重ねられてきた歴史を証明するものですから、途切れることなく後世へ伝えていくことは、とても重要なことだと思っています。普段皆さんの住む地域にある石碑や古い建物なども、歴史を伝える貴重な財産です。ぜひ、文化財を身近に感じてみてください。

ところで・・・市の指定文化財には、他にどんなものがありますか？

市内にある文化財のうち、市にとって重要なものを深谷市指定文化財として指定しています。

現在市には、有形、無形など合わせて261件の指定文化財があり、県内でも随一の多さを誇っています。そして、今回新たに指定された3件のほかにも、富岡製糸場図大絵馬や旧深谷宿常夜燈など、歴史的価値の高い文化財が多く存在します。

市ホームページでは、市の指定文化財を紹介しています。ぜひご覧ください。

HP『深谷市の歴史と文化財』で検索

